

経った今でもその手を掴むことはできず、被害者の方々は日本への帰還を果たせていない。今夏、私は『拉致問題に関する中学生サミット』に県代表として出席し、めぐみさんのご兄弟の横田拓也さんの話を聴いた。被害者自身の辛さや苦しみはもちろんとても大きいけれども、それ以上に被害者のご家族の不安や焦りも大きい。「もう一度会いたい」その思いが放たれた矢のように真っ直ぐに私に突き刺さった。その思いに共鳴し、私は「拉致被害者の方々を絶対に取り戻す」と決意した。サミットに参加した人数や政府の方の人数は日本人口と比べるとほんの一握りでしかない。拉致問題という、とてつもなく重たい問題の一部の人間だけで解決するには限界がある。だからこそ拉致問題を解決するためには国民一人ひとりが拉致問題について知り、「被害者を取り戻す」という気持ちを高めなければならぬ。解決への意識をもつ人が多いほど、問題解決への力強い後押しとなる。し

かし、現実には拉致問題を知る人は少なく、知
っていたとしても言葉だけ、という人が多い。
だから拉致問題を知り被害者の帰還を強く願
うようになった私が、率先して拉致問題の現
状を広く伝えなければならぬ。私の被害者
奪還の決意のきっかけとなったこのサミット
のように、私の作文を多くの人に読んでもら
うことが拉致問題を知るきっかけとなるはず
だ。めぐみさんが拉致された新潟県では拉致
問題の啓発活動が学校でよく行われていると
聞く。しかし、私は拉致問題について学校で
学んだ記憶がないに等しい。日本全体に関わ
る問題の取り組みに差があってはならない。
拉致問題は人の自由を理不尽に奪う人権侵害
でもある。いかに自分事として考えられるよ
うにするか。まずは人権週間に拉致問題を取
り入れることを学校に提案したい。
今も被害者の方々は自由を奪われながらも
助けを求め、手を懸命に伸ばしている。私達
はその手を掴まなければならぬ。